

# 新たな知性の誕生——平田篤胤考察——

星 山 京 子

## 序

折口信夫（一八八七年～一九五三年）は「平田國學の傳統」<sup>1</sup>の中で、従来輕視、あるいは無視されがちであった平田篤胤の怪奇研究を平田学の新たな側面としてとりあげ、篤胤を民俗学の先駆者として再評価すべきであると主張した。中でも氏の次のような主張に注目したい。「篤胤先生の學問といふものは、もつと大きくならなければならぬし、もつと違つた方面にも進んで行かなければならぬものが、残つてゐるといふことになる。だからわれ／＼の考へてゐる篤胤の國學といふものは一部面だけで、全面ではないといふことです。」<sup>2</sup>戦後、国粹主義の思想的根拠としてでなく、思想史の立場から篤胤の思想を新たに見直そうとする研究が活発化したにもかかわらず、篤胤は常に「規範学」の提唱者として論じられてきた。<sup>3</sup>折口はそのような篤胤研究の狭さを指摘し、篤胤の思想の多方面への広がりを取りあげなければ、その思想の全体像を理解したとは言えないと主張したのである。折口のこのような篤胤論は、その後の篤胤研究における新境地を開くべく重要な提言であつたはずである。し

かしこのような折口の重要な提言にその後の平田篤胤研究は、十分答えてきたと言えるだろうか。

答えは否であろう。戦前の日本を支配した国粹主義の思想的根拠、あるいは「規範学」の提唱者という否定的な枠内を越えて、篤胤の思想を見直そうとする研究が行われてきたことは事実である。例えば、子安宣邦氏は、平田学における「幽事」の概念に注目し、平田学の意義を現世における不遇な倫理的行為者の来世での救済に置いている。子安氏に代表されるこのような研究は、篤胤の思想の一部を取り上げて論じたものであり、氏の問題関心からして、その全体を取り上げて論じたものではない。折口が提言した、篤胤の怪奇研究に代表されるような平田学の多面性をどのように理解するか、という問題は、その後も依然として篤胤研究の大きな課題であつたと言えよう。

この問題に答えようとしたいくつかの論考の中で飛鳥井雅道氏の篤胤論は際立つていふ言えよう。氏は「思考の様式——世界像への試み——」<sup>3</sup>の中で、篤胤が西洋の知識を貪欲に吸収していたことを指摘し、このような知的態度は、広範囲な西洋知識の流入と雑

多な情報が混在していた化政期の江戸社会の影響であるとする。そして氏は、従来の研究史を批判し次のように述べている。

「規範学」の提唱者、篤胤と妖怪・天狗に没入する篤胤を別物と考えてきた研究史は、篤胤の書き残した二側面の一方ずつを強調したにすぎないことである。篤胤の発想からは、これは別の側面どころか、一つの精神的発想に統一されておき、極言すれば、オランダの地球儀に学ぶことと、寅吉から出雲の祭りについて学ぶことは、まったく同じ精神態度によっておこなわれていたのであった。

このように飛鳥井氏は、篤胤の怪奇研究を平田学の中に位置づけることを試み、篤胤の思想を化政期江戸の市井の発想ととらえることによって、その統一的な理解に挑んでいる。しかし飛鳥井論文では、民衆を無意識のうちに権威に服従させるような「規範学」の提唱者としての従来の否定的な見方を批判し、新しい篤胤論を打ち出そうとしたばかりに、国粹主義的思想を基盤とした規範学的な側面を平田学から排除して論じてしまっている。つまり、飛鳥井氏の論考も篤胤の思想の全体を取り上げ、統一的に理解したものであるとは言えないであろう。

相良亨氏は、和辻哲郎（一八八九年～一九六〇年）と先の折口信夫の篤胤論にふれて次のような問題意識を提示する。「和辻氏の理解と折口氏の理解を、切りはなされた篤胤の二面としてではなく、統一的に理解することが、今後の課題であるようである。」つまり、和辻の言う「狂信的國粹主義」者としての篤胤と、折口の言う民俗学の先駆者としての篤胤の双方に共通した篤胤独自の問題意識を、

見い出すべきであると言っているのである。皇国史観的な面や現世における仁義礼智の実践を説く「規範学」的な面は、篤胤の思想の全てではないにせよ、その一部を形作るものであることは間違いない。

本稿の目的は、平田学の内包する多面性を個別に議論するのではなく、それらを統一的に理解することにある。このような問題関心に取り組んでいくために、まず第一にこれまであまり論じられることのない平田学と蘭学との関わり、さらに篤胤の西洋理解について論じることによって、平田学の持つ新たな側面を提示していく。そして蘭学への志向や西洋理解を含めた多面性——国粹主義的側面、規範学的側面、鬼神妖怪や死後の世界への探求——は、篤胤のどのような独自の問題意識のもとに矛盾することなく、統一されていたのか、という問題を究明することが本稿の最終的な目的である。これにより篤胤の思想の全体像に迫っていきたいと考える。また、この大きな問題を解明してこそ、先の折口信夫の貴重な提言に対する答えとなるだろうと確信する。

### 一、篤胤の蘭学の素養

これまで一般的に、国学者、あるいは国粹主義的思想家という枠の中で論じられていた篤胤であるが、彼が若い頃、実際に蘭学を学んでいたことを示す二つの貴重な資料がある。次の一節は、篤胤自身が一八四二年（天保十二年）に記した履歴書からの抜粋である。

文化八 三十六 一スンプにて玉の眞はしらの著述の

一蘭學の

また篤胤は、奥村増馳（生没年不明）という人物の著作である『経

緯儀用法図解』の序文を一八三八年（天保九年）に書いているが、次の一節はその抜粋である。

抑このぬしはも。己まだ若くて。西洋なる。窮理といふもの學びせしほどの。親しき友にて。かたみに世のため。國のために。なりなむ事をこそ。學びとらめ。と語らひかはせる中なりしを。

（中略）ふりにし事ども語り出れば。はや三十とせ餘りの昔なりけり。

以上挙げた二つの資料から、篤胤が若い頃蘭學を学んでいたことがわかるのである。奥村増馳という人物は、算学者であり、天文学、測量学にも通じていた博学多才の人である。彼は弧度三角法を本多利明（一七四四年～一八二二年）に、測天量地術を伊能忠敬（一七四五年～一八一八年）に学び、さらに高野長英（一八〇四年～一八五〇年）に蘭學を学んでいる。このように蘭學者として当時最も著名な人々に直接教えを受け、先駆的な研究をなし遂げた奥村と篤胤は若い頃非常に親しく、共に蘭學を学んだという事実は注目に値するものだと思われる。

さらに「ふりにし事ども語り出れば。はや三十とせ餘りの昔なりけり。」という一節から篤胤が蘭學を学んだ時期を推測することができる。この序が書かれたのは一八三八年（天保九年）のことであるから、その三十年ほど前と言うとちょうど篤胤が江戸で塾を開いた時期である。篤胤独自の思想の基礎は、『盡能真柱』が成立した一八一一年（文化八年）に完成したと考えられることから、篤胤は、独自の思想形成期に西洋の學術にかなり傾倒していたということが推測されるのである。また同じ時期に『本教外篇』（一八〇六年）

や、後述する『千島の白波』（一八一三年）などが相次いで成立していることもこの頃の篤胤の西洋への関心を裏づける証拠となりうるであろう。

## 二、篤胤の西洋観

このように若い頃蘭學の素養があつた篤胤であるが、具体的に西洋の學術に対してどのような見解を持っていたのだろうか。まず篤胤は、西洋の醫學を日本の古伝にないものであるからとらず、とする世の國學者に対して次のような反論を行っている。

人の體内の有狀を。委く云へること。古へには有らざるを。遠西の人の見明らかたる趣は。現に人體を解き見るに違ふこと無ければ。其の説に據たらむに。もし此の論者の言の如くは。これ蘭説を混雜したるなり。人の體を如此くならず。と強ひて我意を立むか。

この一節に見られるように、一つのことを理を持って徹底的に究明しようとする西洋人の學問的態度を篤胤は非常に稱賛しているのである。西洋人は人の臓器の機能を知るために、実際に体を解剖して事細かに調べる。そしてもし、どこかの臓器に異常があつた場合、その正常な機能に照らし合わせてどこに異常があるのかを明らかにして治療する。つまり西洋の醫學は正確な事實に基づいている。だから日本においても取り入れるべきだ、と篤胤は言うのである。つまり篤胤は、外国の説であつて日本の古伝に記されていないことも事実に近い、正しいものであれば取り上げるべきであると考えていた。あくまでも日本の古伝に固執し、他國のものは他國のもので

あるからとらず、という世の国学者の偏狭な態度を篤胤は批判してやまないのである。このように篤胤が、西洋の科学とそれを生み出した実証主義に基づいた合理的精神を非常に高く評価していることに注目したい。

そもそも篤胤は、学問というものを次のように認識していた。「近頃。同門の人らにも。外、國の事は。絶て學ぶに及ばず。我が大御國の事だに知らば。足らはぬ事なし。と思ふ由なるは。甚く固陋なり。實は外國の事件をも知らざれば。大皇國の學問とは云べからず。」つまり自國の書物だけを読み、自國の事だけを知っていれば學問が完成されたとは言えない、他國のことも學んでこそ學問と言えるのである、と篤胤は言うのである。篤胤のこのような態度は次の一節からも読み取れる。西洋の地動説を日本の古伝にないものであるという理由のもとで、排斥しようとする同時代の国学者に対して篤胤は、次のような厳しい批判を行っている。「凡人の量り知られぬ事ぞと云ひて。通るゝより外に。何の明らめたる答へも有るまじくこそ。其凡人の量り知られぬ事なむ。やがて不審き事なるを。不審き事なしと云ふは。愚昧にしていぶかしと思はざるか。」

以上述べたことから、篤胤を排外思想家と見なす従来の一般的な定義は、篤胤の思想の一面を強調したものにすぎないのであり、全く篤胤の全体像を理解していないものであると言わねばなるまい。これまで「頑<sup>15</sup>」な思想家と見なされてきた篤胤が、国学者を含めた同時代の学者たちの「狭き心<sup>16</sup>」や「頑<sup>15</sup>」さを逆に批判しているのである。彼は蘭学の合理性を認め、現実には合わない空理空論に成り下がってしまったっている当時の儒者や、国学者の思想の非実践性を

見抜いていた。この点において篤胤は、国学者というよりも、蘭学者に近い心性を持っていたと言えよう。篤胤のこのような一面が長い間看過されてきたことが篤胤の思想を国粹主義の元凶であるとか、排外思想の典型であるという一元的な見方に限定してしまったのである。

### 三、平田学の統一的理解(一)

——鬼神妖怪・幽冥界への探求

しかし、このような平田学が持つ新たな一面を浮き彫りにしていくと、そこに存在する大きな矛盾に気づかされるのである。すでに述べたように篤胤は、西洋の学術に対して非常に深い理解を示していたのだが、彼が最上の国として崇め奉ったのは、進歩的な科学を生み出した西洋ではなく日本であったことは言うまでもない。また同時に彼は、西洋の合理的精神を高く評価する一方で、鬼神妖怪や死後の世界のような非合理的存在を強く信じ、それらを真剣に自分の研究対象として生涯追求し続けたのである。このように篤胤という人物の中には、非常に多種多様な人格が共存しているのであるが、このような多面性が篤胤という一人の人物の中に存在している以上、これらの多面的な要素を統一するような独自の問題意識を彼は持っていたはずだと考えられる。それは一体何であったのだろうか。

第一に、なぜ篤胤は蘭学者の心性に通じるような合理的精神を持っていながら、鬼神妖怪や幽冥界の存在を強く信じ、それらを探求していったのか、という問題について考えてみたい。まず篤胤は「物知り人」について次のような独特な定義を行っている。

物知り人と云ふは、神祇の情態の。幽りて著明からぬを。知辨ふる由の稱なる事を曉るべし。(中略)中昔の書等に。もの知と云へるは。大かた漢籍物語などよみ説て。世の目に見ゆる少事を知れる倫を云ひ。今、世にも然る倫をさして。物識人と云なるは。甚く故實に違へる語なり。

この一節に見られるように、篤胤は、書物を読むことだけで現世に起こる事象に関する知識をたくわえている人を「物知り人」と見なすことに反発し、鬼神妖怪の実態にまで認識を深めた人こそ真の物知り人であると考えていたのである。また篤胤は、幽冥界のことを語る天狗小僧寅吉に初めて会った時、次のような思いをめぐらせている。

現世の趣も昔は甚く秘たる。書も事も。今は世に顯はれたるが多く。知り難かりし神世の道の隅々も。いや次々の明になり。

外國々の事物。くさくさの器ども。年を追ひて世に知らるゝ事と成ぬるを思ふに。此は皆神の御心にて。彼の境の事までも。聞知らるべき。所謂機運のめぐり來つるにやなど思ひ續けつ。

「現世の趣も昔は甚く秘たる。書も事も。今は世に顯はれたるが多く。」という一節は、当時の蘭学の発展を指していると考えていいだろう。西洋の学術が日本に取り入れられ、蘭学として発展する前は、天体の動きや人間の臓器の位置やその働きなどに関する正確な知識を得ることなど思いもよらないことだった。しかし以前人々が決して知ることが出来なかつたことが蘭学の発展により次第に明らかになってきている。そして今度は幽冥界に実際に行ったという経験を持つ者の話を聞くことによって、ついに幽冥界のことまで知る

ことが出来る時代の到来を篤胤は期待していたのである。

篤胤は、以前は不可能だったことが可能になる時代を感じながら、この世に起こるありとあらゆる事象の理が明らかになる時をめざして、蘭学を含めた様々な学問へ、さらには鬼神妖怪や幽冥界の探求へ没入していったのではないだろうか。つまり篤胤は、この世における全ての事象の理を全て知ろうとした人であつたと言えるのである。このようなことから蘭学を学ぶことと鬼神妖怪の実態を明らかにするという一見相反する要素が、篤胤においては一つの目的の上に統一されていたと考えていいだろう。

また篤胤は、鬼神妖怪について言及しながら、古学を次のように独自に定義している。

古道の學問は。かゝる事までに深く心を用ひて。其、實地の道理を採ね究めて。偶に然る事ありとも怖ること無く。惑ふことなく。退散せしむるを。倭心の鎮りと云ふ。然れば常に謂ゆる

奇談の實事を記せる籍をも讀味ひて。其、實徴を明さむ事も。また古學の肝要なり。

さらに篤胤は、妖怪とはいかなるものか、なぜ人を化かすのか、どこから来たのか等、鬼神妖怪について正確な知識を得ることは、「大倭魂の。固めの柱の立にぞ有ける。」とまできっぱりと言いつ切っている。

「大倭魂」というと強い皇国史観が想起されがちだが、篤胤の意味する「大倭魂」には、別の深い意味合いが含まれていることがこの一節から読み取れる。篤胤は、目に見えることだけではない「幽れたる事」にまで認識を深め、鬼神妖怪に惑わされない強い精神を

得ることは「倭心の鎮り」になると考えていた。つまり鬼神妖怪をも含めた、この世に起こりうる全ての事象を理解し、鬼神妖怪に惑わされない確固とした精神こそが、篤胤にとつての「大倭魂」だったのである。ここで「大倭魂」とは、篤胤にとつて現世に生きる人間が必ず固めるべき重要な精神であつたことを想起すれば、篤胤の行つた怪奇研究の意図は、鬼神妖怪をも含めたこの世に起こる全ての事象の理について正確な知識をもたらしことによつて、人々に生きる安心を与えることであつたと考えられるのである。

しかし篤胤の言う「倭心の鎮り」とは鬼神の実態を暴き、合理的な説明をすることによつてそれらを実際には存在しないもの、あるいは迷信ととらえることによつて安心をもたらしといったような所謂「妖怪退治」の類いものではないことに留意したい。篤胤は先にあげた一節に続けて次のように述べている。

學問の魂の御柱なき人は。偶にさる事に出曾ふ時は。大に惑ひて。彼謂ゆる戸牖の錯。なり動くにも愕然して。夜目のいすゝき。伊豆々志伎こと有めるを。魂に柱の立たる人は。まづ斯の如き奇しき天地の間に居て。神祇の妙なる理を辨へて。世には様々のわざを爲す妖魅のある事も。常に知りて在る故に。怪き事の有りとも驚かず。

篤胤は、鬼神妖怪や幽冥界を「實事」ととらえ、その「實徴」あるいは「實地の道理」を明らかにすることが「古學の肝要」であるとしている。鬼神妖怪や幽冥界が実在すること——これは篤胤の信念といふべきものであり、彼の思考において血肉化していた要素であつたといふべきであらう。従つて篤胤の意味する「倭心の鎮り」と

は、鬼神妖怪や幽冥界の存在を確信し、それらを知るものだと信じることによつて安心を得るといった性格のものであつたのである。化け物がいけないと思うから世の人は化け物が出たときに慌てふためき、それらに惑わされるのである。しかし実際にいるものだと認識していれば、それらが出たときも人は驚かないというのが篤胤の論である。また化け物が出た時の心得について「随分馳走して。幽冥世界のことを問うべし。」と述べていることから、現世に生きる人間一人一人が幽冥界の情報を得ることが、化け物や死を恐れない確固とした「大倭魂」の固めにつながる、という篤胤の意図が伺い知れるのである。

十八世紀後半からの本格的な蘭学の隆盛に伴い、知識人たちの多くは西洋の科学知識を受容することによつて、徐々に非合理的な世界から脱却していったと言える。既に述べたように篤胤も蘭学を学び、西洋の科学精神に共鳴した一人であつた。しかし当時の庶民社会においては、鬼神妖怪は依然として強い影響力を持つものであり、人々の畏怖の対象であつた。さらに死後の不安は、常に人々に付きまとつていたのであり、人間の死後について明らかにすることは、人々の永遠の願望であつたと言つても過言ではなかつたであろう。篤胤は生涯このような庶民社会に密着して暮らし、庶民に非常に親近感を感じていた人であつた。このような篤胤の意識は次の『稻生怪物録』(一八〇六年)の序文において端的に表れている。「そもくこのものがたりよ。大かたの世の人は疑はじを。ものしれる人は信はで。うけがふ人を愚なりといはまし。己もこをうけがふ大よそ人の徒なり。」このようなことから、篤胤の鬼神妖怪を「實事」ととら

える心性は当時の庶民の日常の思考の中で育まれたものであると考  
えられるだろう。

#### 四、平田学の統一的理解(二)——尊王思想

次に篤胤は、盲目的に西洋を批判する他の国学者の偏狭性を厳し  
く批判しながら、なぜ自ら偏狭な尊王思想に埋没してしまった  
のか、という問題について考察を行っていきたい。周知のように、  
日本は「万国の祖国」であり、他国よりも格段に優れた国である  
という皇国意識は篤胤の議論の前提に常にあった。特に戦前までは、  
篤胤のこのような面のみが強調され、国粹主義の元凶としての篤胤  
像を一般に強く植えたことは言うまでもない。

篤胤の尊王思想には垂加神道の影響があったことは先学が示す通  
りである。しかし、篤胤が尊王皇国意識をあれほどまでに執拗に鼓  
舞した最も大きな理由は、篤胤が生きた十九世紀前半という特殊な  
時代性を考慮に入れる必要があると思われる。十八世紀後半から日  
本沿岸にたびたび外国船が到来していたことは、国内に切迫した対  
外危機感を強めた。実際篤胤は、このような未曾有の対外危機に非  
常に関心をもっていたのである。既に述べたように、篤胤の西洋に  
対する関心は人一倍であったことを思うと、年々増加しつつある外  
国船の来航に篤胤が無関心でいられるはずがなかったことがわかる  
だろう。

篤胤は一八一三年(文化十年)に十八世紀後半から日本沿岸に出  
没していた外国船に関する資料の集成である『千島の白波』を、一  
八二二年(文政五年)には、この年に伊豆の港に来航したイギリス

船のことを記した『蛮船一件』を著している。また『千島の白波』  
の中に収められている地図は、「彼地に跋渉れる」ものであった。篤  
胤が北方の探検家である近藤重蔵(一七七年―一八二九年)や最  
上徳内(一七五四年―一八三六年)と親しかったことは注目に値す  
る。近藤重蔵は、一七九八年(寛政十年)に東蝦夷を、一八〇七年  
(文化四年)には西蝦夷を探検、最上徳内は一七八五年(天明五年)  
に千島列島を探検しているから、その時の体験談を篤胤は『千島の  
白波』執筆の重要な資料にしたと思われる。また篤胤が一般には秘  
されていた幕府の外交文書をもひそかに手に入れて読んでいたこと  
もわかっている。一八二七年(文政十年)の篤胤による書簡には次  
のような記載がある。「其節沿海異聞と申もの一冊借用、とめ置申  
候、甚多用にて大に延引いたし候て、漸此程書寫申付置候へ共、今  
日の間に合不<sub>レ</sub>申候、次便の節必返上可<sub>レ</sub>致候、」この『沿海異聞』  
とは大田南畝(一七四九年―一八二三年)によって著された外交文  
書である。大田南畝は幕臣であり、当時の幕府の外交政策に通じて  
いた人であった。この書簡が出される二年前には、既に文政の無二  
念打払令(一八二五年)が發布されており、このような非常に切迫  
した海外情勢の中で篤胤は、外国と幕府との間に取り交わされてい  
た文書に通じていたのである。以上のことを考えあわせると、文化  
・文政期(一八〇四年―一八二九年)に、篤胤が当時高まりつつあ  
る対外危機に強い関心を持ち、最新の情報を得ようとしていたこと  
がわかるのである。

そしてこの時期の篤胤の時局意識には明らかに変化が見られるこ

とに注目したい。まず、文化年間（一八〇四年〜一八一七年）に成立した『千島の白波』に見られる篤胤の時局意識を見てみよう。

今しこそ万國の戎狄ら。實の道理をし。能くは知り辨へざれば。何くれと。射向ひ奉る行ひも無きには非ねど。終には。大神等の恩頼の行通りて。彼ら盡く。心の底ひ服ひ仕、奉るべく成、なむこと。遅き速きの程こそ知らね。鏡に挂て見るが如し。

この一節は、当時日本沿岸に出没していた外国船に対して篤胤が述べている箇所である。ここから読み取れるように、篤胤はおびたらしい数の対外関係の資料を収集し、常に対外危機に関心を払っていたにもかかわらず、当時の列強の接近を侵略的危機として深刻にとらえていないのである。日本は神国であるが故に、たとえ外国に侵略の意図があっても、いかなる時も神に守られるのだという非合理的な思考は篤胤において絶対的な位置を占めている。

しかし、このような外国船の来航に対する篤胤の樂觀論は、次第に変化していったことが文政年間（一八一八年〜一八二九年）に成立した『蛮船一件』から読み取れるのである。篤胤は伊豆の港に立ち寄ったイギリス人について、次のような噂を聞いたという。この時イギリス人は、船中で病気になる者を治療するためといって、水以外に赤土を要求した。この一件をとりあげて篤胤は、外国船はいかなる目的を持って日本に来るのか、という問題について次のように述べている。「本より神國にて。天神地祇の守護嚴重なるに。況て武備萬國に比類なく。神々しき御國なれば。「喧ぐとも國の御棧威に摧なむ。底よりの國ゆする白波」とは思へど。（中略）異國人に土を取らする事は。吉からぬ事とおほゆ。然るは外國々には。

種々惡しき咒詛事も多かりと聞ゆれば。偽りて漁船の状をなし。病人をも作り咒詛の料に。土を取りに来れるには非じか。」ここには欧米列強の接近には侵略の意図があるというはつきりとした認識までには至っていないにせよ、彼らの接近を何か不吉なことの前兆と見なす漠然とした危機意識、言い換えれば、欧米列強を脅威と見なす認識が篤胤の中にも始められていることがわかるだろう。「本より神國にて。天神地祇の守護嚴重なる」日本であるが故に、外国がたとえ攻めてきても決して負けるようなことはありえない、という『千島の白波』に表れているような樂觀的な意識は、もはやここにはない。このように文化期から文政期にかけて、篤胤の時局意識の変遷が読み取れるのであり、これはしだいに深刻になりつつあった外圧が、篤胤の樂觀的な対外意識を転換させていったと見てよいだろう。

以上概観したように、篤胤が、尊王皇國意識と道徳の実践をあれほどまでに鼓舞した背景には、以上述べたような対外危機が非常に高まった混乱の時代があったのである。篤胤は対外危機に関する資料を収集し、最新の情報を得ることによって、徐々に欧米の接近を深刻な危機意識をもってとらえるようになっていったことは既に述べた通りである。また、このような対外危機は、当時の江戸社会における義理人情の欠如、幕藩体制の動搖に拍車をかけた。つまり、化政期は揺れ動く過渡期の時代であったと言えるのである。このような混沌とした時代に生きた篤胤は、誰よりも敏感に既存の権威が徐々に崩れていくのを意識していたのではないか。このような意識が、篤胤に対外危機に対抗しようとする精神的支柱の必要性を感じさせたのだと

思われる。その結果、篤胤は動揺しつつある民心への新たな精神的支柱として、尊王皇国思想や道徳の実践を鼓舞するに至ったのだと考えられよう。

## 結 論

以上述べたように、篤胤は、幕藩体制の動揺、またこれに拍車をかけた切迫した対外危機を当時の社会が克服すべき深刻な問題として切実にとらえた。その結果、動揺しつつある民心に対外危機に打ち勝つことが出来るような精神的支柱として尊王皇国思想や道徳の重要性を唱えるに至った。また一方で、篤胤は、鬼神妖怪や死後の世界に強い関心を持ち、それらを飽くことなく探究した。そしてこれは日常生活において鬼神妖怪に惑わされる人々に、それらに惑わされない確固とした「大倭魂」を植えつけ、安心をもたらすという目的のもで行われたものであった。また、西洋の学術方面への関心も、この世に起こる全ての事象の理に認識を深めることによって、安心を得るといったような鬼神妖怪の探求と同様の問題意識から発せられたものであることは既に述べた通りである。

平田学における尊王や道徳を鼓舞した一面と鬼神妖怪への探究、そして西洋学術への関心は、一見それぞれ別個の問題意識のもとで並行して行われたものであるかのように見える。しかし、これらの平田学が内包している一見混沌とした要素は、民心に精神的支柱を植えつけ、安心をもたらすための篤胤の思想的営みであったのである。民心に精神的支柱を植えつけることによって現世での安心をもたらすこと——これが篤胤が生涯かけて取り組み、格闘したテーマ

であった。以上のようにとらえることによって、平田学のもつ矛盾を統一的に理解することが出来るのではないかと考える。又、以上論じたような篤胤独自の意識のもとで誕生した平田学は、日本思想上、他に類のない新たな知性の誕生であったと言うことができるだろう。篤胤自身、自分の思想を「古人もかつては、師もいまだ考へられざりし説なる」と認識していた。

これまで篤胤は、国学という一つの学統の中に位置付けられ、国学者という枠内で論じられることが一般的である。しかし、国学とは本居宣長（一七三〇年〜一八一〇年）が言うように、「すべて後世の説にかゝはらず、何事も、古書によりて、その本を考へ、上代の事を、つまびらかに明らむる学問」であるならば、篤胤の思想が国学という思想の枠内を逸脱していることは、本稿でこれまで述べてきたことから明らかである。それにもかかわらず、平田学を国学発展史の一部とみなすことは、篤胤の思想の一面を強調し、他を切り捨ててしまう結果を生むのではないか。平田学は、篤胤が十九世紀前半という特殊な時代に日本社会が孕んでいた問題と真つ向から格闘したことによって誕生した新たな知性であった。このような平田学を日本思想史の中でどのように位置づけていくか、これは今後の課題としたい。

## 注

(1) 詳しい内容については、「平田國學の傳統」(『折口信夫全集』第二十卷所収、中央公論社、一九六七年)を参照されたい。

(2) 同書、三四八頁。

- (3) このように平田学を「規範学」と見なす研究は戦前の村岡典嗣氏の研究(『宣長と篤胤』創文社、一九五七年。)をはじめとして次のようなものがある。例えば丸山真男『日本政治思想史研究』を「宣長學の學問性の崩壊」(丸山真男『日本政治思想史研究』東京大学出版会、一九五二年、一八一頁。)であるとす。松本三之介氏も同様の見解を示し、国学は「封建支配者によって民心把握の武器」(松本三之介『国学政治思想の研究』未来社、一九七二年、一三二頁。)となったとしている。また田原嗣郎氏も同様の問題意識を持っている。詳しくは田原嗣郎『平田篤胤』(吉川弘文館、一九六三年)を参照されたい。
- (4) 詳しくは子安宣邦『宣長と篤胤の世界』(中央公論社、一九七七年)を参照されたい。
- (5) 「思考の様式——世界像への試み——」、林屋辰三郎編、『化政文化の研究』所収、岩波書店、一九七六年。沼田哲氏も飛鳥井氏と同様の問題関心を持っている。(『鬼神・怪異・幽冥——平田篤胤小論』、『日本近世史論叢』下巻所収、吉川弘文館、一九八四年。)また井上順孝氏も「平田篤胤と民衆基層信仰」(『宗教研究』五十一巻一号、日本宗教学会、一九七七年)の中で「篤胤の思想は多くの先行思想の重層的、あるいは並存的雑居状況である」(同論文、二十二頁。)としながら、その多くの思想を包括していた篤胤独自の「凝集力」(同論文、二十三頁。)を見いだそうという問題意識を持っている。そして篤胤の思想は、多くの民衆信仰を吸収することによって形成されることを指摘している。
- (6) 前掲飛鳥井論文、四九三頁。
- (7) 相良亨「平田篤胤をめぐって」、『新修平田篤胤全集』月報十五、名著出版、一九七八年、一月、六頁。
- (8) 和辻哲郎『日本倫理思想史』下巻、岩波書店、一九五二年、六七八頁。
- (9) 平田学と蘭学との関わりを考察した数少ない論考の中には、次のようなものがある。ドナルド・キーン「平田篤胤と洋学」、ドナルド・キーン『日本人の西洋発見』(芳賀徹訳)所収、中央公論社、一八六八年。伊東多三郎「國學と洋學」、『歴史学研究』七巻、第三号所収、歴史学研究会、一九三七年、三月。
- (10) 「篤胤直筆履歴書項目覚」、渡辺金造『平田篤胤研究』所収、鳳出版、一九七八年、三頁。なお本稿で引用したそれぞれの項目の下に渡辺氏による注記があったが、本稿では省略した。
- (11) 「経緯儀序」、「氣吹舎文集」の二の巻、『新修平田篤胤全集』第十五巻、名著出版、一九七八年、(以下「全集」と省略)三九三〜三九四頁。
- (12) 「天説辨々」、「全集」第七巻、三三三頁。
- (13) 「玉樺」九之巻、『全集』第六巻、五四〇頁。
- (14) 「天説辨々」、「全集」第七巻、三三四頁。
- (15) 同書、三三四頁。
- (16) 同書、三三三頁。
- (17) 「玉樺」七之巻、『全集』第六巻、三九一〜三九二頁。
- (18) 「仙境異聞」、「平田篤胤全集」第三巻所収、平田學會、一九一一年、一頁。

(19) 「玉櫛」七之卷、四二七頁。

(20) 同書、四三〇頁。

(21) 同書、三九一頁。

(22) 同書、四二七頁。

(23) 同書、四二九頁。

(24) 「稻生物怪録序」、「気吹舎文集」一之卷、『全集』十五卷、三  
四六頁。

(25) 平田学の成立と民間との関わりについて考察した論考には、  
井上順孝氏の前掲論文の他に高橋美由紀「平田神道の庶民性—  
その方法と構造をめぐって」(源了圓編『江戸後期の比較文化  
研究』所収、ベリかん社、一九九〇年。)がある。高橋氏は「篤  
胤学とは、庶民の持つ土俗的宗教意識や生活倫理を積極的に汲  
みあげ、それを記紀的神話世界の中に嵌入し、両者の結合の上  
に独自の神道的世界を構築したもの」(前掲論文、二九二頁。)  
と見なすことよって宣長学との差異を強調し、篤胤のねらい  
は神道を庶民化することにあつたとしている。

(26) 平田学における垂加神道の影響についての論考には、次のよ  
うなものがある。細谷則理「平田篤胤大人皇道思想の基地」、『国  
学院雑誌』三十卷、九号、一九三二年、九月。三木正太郎「垂  
加神道と復古神道との関係についての一考察——日之少宮傳  
と幽冥観——」、「神道史研究」第五卷、第二号、一九五七年、  
三月。三木正太郎「神籬磐境の傳と直毘靈の精神——垂加神  
道と復古神道との関係についての一考察——」、「皇學館大學  
紀要」第四号、一九六六年、三月。

(27) 「千島の白波」、『全集』補遺五卷所収、一頁。

(28) 「新庄道雄宛平田篤胤書簡」(文政十年閏六月二十九日付)、  
渡辺金造『平田篤胤研究』所収、鳳出版、一九七八年、八二—  
頁。

(29) 「玉櫛」九之卷、五四二頁。

(30) なお『全集』補遺五卷に納められている「蛮船一件」は、草  
書体で記述されているため、本文では同書が活字で収められて  
いる次の文献から引用した。「與植辨」、「気吹舎文集」、「全集」  
十五卷所収、四〇四頁。

(31) 「靈能真柱」、「日本思想大系五十平田篤胤 伴信友 大國隆  
正」所収、岩波書店、一九七三年、一一七頁。

(32) 「うひ山ふみ」、「うひ山ふみ 鈴屋答問録」所収、岩波文庫、  
一九三四年、三十八—三十九頁。

(國際基督教大学院)